営のいかんを問わず決められてきたという市長さんの指摘は、新鮮だと思います。他産業では国や県が個別に方向を示し、強引な指導で成果を上げてきました。農業にそういった個別の施策誘導が可能でしょうか。

例えば小学校の生活科に農業者が協力するのは素晴らしいことです。全国農協中央会の大会でも決議されました。しかし白根は力不足のために何もできなかった。こういう協力体制を取るには地域全体の、ものすごい底力がないとできない。活力を出すには、数が必要になるでしょう。農村全体の底力をアップするために、個別誘導は有効でしょうか。

市長　個別誘導というより自らの目標でしょう。自動車産業などは政府の施策で成功したわけではなく、痛め付けられて、一生懸命やって伸びた。全体的な経済レベルが上がった中で、農業は増産時代の価値観を引き継いだまま、変わらなかった。変化に合わせた経営のやり方があったのではなかったのでしょうか。

土地の面積は変わらないんです。効率を上げなければ整理されるのは経済の原則です。白根市の農業が生き伸びるためには、伸びる芽を伸ばし、選択の自由ができる態勢を国に求めていくことでしょう。白根市の農業基盤からいえば、適地適作ができる。しかしその代わり、相当のリスクは負わなければなりません。

経済の原則を押さえ、みんな一緒という発想が、今の農業の低迷につながったのではないでしょうか。今後ますます厳しいかもしれませんが、競争できる体質を持った人は、それだけ安定した経営ができると思います。その方法として、行政の個別指導ではなく、皆さんが共同してリスクを分散する動きが農業法人でしょう。ほかにも方法はあると思います。

私は市の個性や特色を出すための支援はどんどんやりたいと思います。特徴ある農業、作るだけではない、プラスアルファがあるものを考えていただきたいと思います。

T　白根産米の在庫がまだ残っているという話を聞いています。それは物が悪いからじゃない。白根市の地場産業的なPRが足りない面もあるのではないでしょうか。市として首都圏、大都市に出張所を設けることなども必要ではありませんか。

市長　まさにそうですね。農協もいろいろやっていると思いますが市が直接やらなければならない部分もあるでしょう。何か考えたいですね。

白根市の農産物のPRが足りない。首都圏、大都市に出張所を設けることも考えては…（研究会）

農地を守りながら趣味として農業を続けている人も大事なブレーン（研究会）

T　他の市町村でも東京方面に出張所を持っているという話も聞きます。ぜひ考えてください。

市長　そうですね。山形県は洋ナシの愛好会があって、ホテルを借り切り、著名人を集めて「うまい」と言わせる。有名なスターがそう言えば、すごい宣伝効果になる。白根のル・レクチエの方がおいしいのに、そういうことは仕掛けていない。

T　作るのは上手でも売るのが下手なんですね。PR効果を期待しています。

S　米作りをしている人の中で七十歳を過ぎてもなお、生き生きと米作りに励んでいる姿を見ると、六十歳になったら米作りは終わりという発想をがらりと変えても良いと思います。企業に勤めて定年を迎え、地元へ帰る。農地を守りながら、収益を上げなければならない農業ではなく、趣味としてやれる。これは将来の農業を語る上で、大変大きなものではないでしょうか。

市長　土地と農業をただ愛する人がそういう形で農業をするというのは、いいですね。

S　工業団地ができ、地域に産業を取り入れて働きやすい環境ができました。それによって兼業化が一層

進んだ。楽しんで農業をしている人たちを見ると、農水省がいうような規模拡大ばかりもいえないのではないでしょうか。彼らも農業を支える大事なブレーンなんです。

市長　人口構成からいって一次産業がまだまだ多いというのは事実です。構造的には三次産業が増えてくるだろうと思います。

後継者の状況から見ると、例えば月給制にするとか、近くの町で遊べるという状況がないと、なかなか居着いてくれないのではないですか。文化的にも遊びでも、人が寄れる場所があって、若い人は農地は作業場・自分の会社だというような感覚になっているのではないでしょうか。

S　法人化については二、三年前から話は出ます。将来を考えるなら今のうちから土台を作っておこう、良いことだと乗ってきます。話がまとまり、この規模なら作業員は何人、あとは事務員と、人数が限られてきます。そうすると、自分が残らなければ話には乗れないということで、つぶれてしまう。

T　私の部落では二つの農業法人が集落の六〇％以上を作付けしています。残りの農地を耕作している人は、跡継ぎがなく、私限りでやめるという人がほとんどですから、自然にそれなりの形で農地が集積してくるのではないかと思っています。

しかし、大きいことが安全かというと、決してそうではない。赤字の不安は常にありますし、農地は宅地に囲まれてしまっています。団地の外に出ることも考えていますが、そこまで投資して、若い人が跡を継いでくれるかという不安もあります。組織化して二十年たちますが、二十年前の目標が達成されたかというと、そうでもない。所帯が大きくなれば問題も大きいです。

O　農業振興の上で農村地域という地域の概念が非常に固定化しているようです。集落イコール農村地域と設定しているんですが、地域概念をもう少し大きく、流動的にとらえたなら、新しい発想が次から次へと出るのではないかと思います。

私自身の夢を考えても、集落イコール農村地域だという概念が足かせになる。隣接の市町村長さんの中でも広域化について訴えている人もいらっしゃいます。農業についても従来の地域概念を取り崩しては…。

市長　そうだと思いますが白根市なら白根市をアピールするよりどころが必要でしょう。広域というのは、ただ一緒になれば良いというものではないんです。足して二で割ったら損をしますから、自分たちのエリアは決めて共同していくべきでしょう。

さらには後継者問題など、人づくりが大事だと思います。父母と一緒にやりたいと思わせる何かを持った子供を育てることではないでしょうか。そのために白根市を、農村部と市街地がお互いの魅力を認め合うようなまちにしたいのです。それがよそへも波及していくと思います。

皆さんのような積極的な農業者から白根の農村を守っていただき、将来のビジョンを子供たちに伝えてくれれば、子供たちはその気になってくれると思います。今日の表題にあったように、夢を子供に語れるような、都市としての機能を作っていかなければならないと思います。

田んぼが安いからこっちへ来いという時代ではないと思います。価値があれば高くても来ます。俺たちにしかできないというものを、家族や隣近所へ伝えてほしいと思います。

司会　農業経営の基盤をさらにしっかりと固め、所得税が納められる農業を目指しましょう。

農村地域の概念を、もっと大きく流動的にとらえれば、新しい発想が次から次へと…（研究会）

大事なのは人づくり。農村部と市街地がお互いの魅力を認め合えるまちにしていきたい…（市長）